色つきの夢から目覚めよう

インタビュー：ヤツェク・クーロン

"Obudzić się z kolorowego snu"——z Jackiem KURONIEM rozumawia Anna BIKONT
"Gazeta Wyborcza", 11 grudnia 1990

不信任された政府

——今度の政府にも入閣するつもりですか？

クーロン　これまで私は政府の政策決定に参加し、できるかぎりでそれを実行してきた。だが、11月25日〔大統領選〕に政府は不信任を受け、辞任せざるを得なかった。

——1年半前、あなたは国会の35パーセントを占めることの道理を説いて、「今われわれはひとつの選択の前に立っている、変革に参加するのか、それとも自分たちの権威の崩壊ばかり心配するのか」と言った。今もまた似たような選択に直面しているのでは？　もっとも、前ほど劇的ではないが。

クーロン　状況がまったく違う。民主的選挙で社会はわれわれの政策を拒否したのだ。私がいくらそれを気に入らないとしても、社会の決定は受け入れねばならない。

——すると、閣議であなたは内閣総辞職に賛成したのか。

クーロン　全員が総辞職に賛成した。問題は、新内閣が出来るまでの間現政府はどの程度の仕事をすべきかという点だけだった。しかしそれもすぐにはっきりした。政府がただ管理運営だけを行うという考えは、年度末を控えた今、非現実的だ。もしこれが7月とか8月であったら……。とにかく今は、予算を編成し、来年の社会＝経済政策の基本をつくり上げ、さらに年金法も成立させなければならない。

政府は意地悪でも、悪意があるのでも、無能力なのでもない。ただ状況がそうなっているだけなのだ、このことをみんなが納得してくれなくては。もっとも、それでもいくつの政府が途中で変わることになるだろう？

私は長いことタデウシュ・マゾヴィエツキが勝つと信じていた。選挙では理性にもとづいて選択が行われるだろうと信じていた。それが突然、投票日の何日か前、ウッチの集会で、この理屈が理解されないことが分かったのだ。

職業学校や織物専門学校の生徒たちが私に尋ねた。「大臣、私たちは軽工業で働くことになるのでしょうか」。私の答えはこうだった——「以前の政府の大臣だったらそれに答えられただろう、しかし私はその問題について自分の予想を述べることしかできず、おまけに間違うかもしれない」。

ウッチで私が知ったのは、人々が、自分の勤め先はどこになり、給料はいくらで、自分たちの企業はどれくらい販売すべきかなどなどが私次第だと思っているという事実だった。

私は、「これからは自分の責任で生きることになるのだ」と言った。するとこうだ。「ぼくはまもなく織物専門学校を卒業する、4年間勉強したのに仕事がない。なめし革業を習い始めようかと思うがここではなめし革業の景気が悪い。それで洋服の仕立てを習い始めたら、それも不景気だと判明する…」。

「国家と社会は、大多数の人がうまくやっているおかげで機能している」——私は答えた。「確率計算からいえば、君にそのような災難すべてが降りかかる可能性は少ない、しかしありうることだ。先進諸国では適応できない人や失敗した人たちのために人々が援助しあっている。しかし自分が稼いだなかからわけるだけだ。つまり、敗者を援助するためには成功した人が多数いなければならない」。

非常に優秀な簿記係の女性がいるとしよう、蟻のようによく働き、時間も正確だ。ところが会社が倒産し、彼女は失業する。こういう事はいくらでもありうるのだ。わが国ではだれもが「誰々のせいだ」とか「誰を罰すればよいか」と言う。正常な経済においては「誰のせい」も「誰を罰する」も「これが正義だ」もない。成功か敗北かだけだ。

以前のわれわれの暮らしは、惨めで貧しいが安全だった。ところがいきなりすべての秩序が崩壊した。われわれが望んだわけではない、その秩序がなにも生み出さなかったからだ。ギエレク時代の外国からの借入金をだれかが自分の財布に入れてしまったと皆が感じている。ところが、それを食いつくしてしまったのはわれわれなのだ。当時、人々は家を建て、車を買い、家具調度を整えた。

西側世界で生活する人なら、店にあるからといって何でも買えるわけではないことくらいわかっている。ところがわれわれはそんな物の道理さえわからない。品物が店に並んでいるのにそれが買えないとなると、それを当てつけ、挑発、付け上がり、卑劣、スキャンダルだと考える。それだけでもう、政府にノーを言うに十分なのだ。それに、失業がある。明日はどうなるか、明後日はどうなるか、誰も知らない。誰も何ひとつ保証してくれないのだ。

誰が何を約束したか？

――ワレサもティミンスキも福祉国家についてはきちんとした約束はしなかった。あなたは国民が本当にそれを望んでいると仮定している。

クーロン　2人が何を約束したか、あなたは知っているかもしれないが、わたしは知らない。重要なのは、国民が何を聞いたかということだ。政府が悪い、われわれはすべてを約束する――人々はこう聞いたのだ。

ワレサがあまりにも早く上から戦争を始めたので息つく暇もない、という人々の非難は当たっている。しかし、彼が言いださなかったとして、何かが変わっただろうか？　はたして国民にとって、これまでどおりのゆっくりした漸進的な進歩か、それとも突然すべてがすばらしくなるという展望

労相時代、貧困者のための無料給食所で人々と「同じ釜の飯を食う」クーロン

かの選択以外に、何か選択がありえたろうか？　答えはノーだ。私の考えでは、そこに待っていたのがティミンスキの輩なのだ。

たくさんの大統領候補が、全く実行不可能な約束をした。選ばれた大統領は1人だけだが、口にされた約束はすべてがこれからも社会の人々の意識に残る。ワレサのまえには2つの道がある――約束どおりに与えて破局に向かうか（そうするとはわたしには思えないが）、あるいはペルヴェデル〔大統領府〕に引き籠もって「政府が統治するのだ！」と呟くか。

ワレサがだれを首相に任命しようとも、首相はバルツェロヴィチの政策を実行するしかない。どういう意味かだって？　予算を赤字にせず、通貨をインフレから守ることだ。われわれは弱者――年金生活者を守る。力の強い者は抗議してくる、しかし弱い者は声に出さない。炭鉱労働者たちがお金を手に入れようとする。弱者は押し黙ったまま、ただ待っている。炭鉱労働者たちが手に入れると、彼らも名乗り出る。これは選挙キャンペーンの結果だ。

心配なのは、あらゆる企業、都市、地区で、支

払えるだけ支払うようになるだろうことだ。誰もが自分の取り分を取ろうとし、必ずや急速にインフレが進行するだろう。どこからも貰えないひとびとは暴動を起こし、荒れ狂うだろう。

たとえマゾヴィエツキが勝っていたとしてもストライキの大波が襲っただろう。多分、最終的にわれわれはいまいる地点に戻ってくることになる。共産主義から抜け出すためにはそれ相応のコストを支払わなければならない。

――マハルスキ上院議員や様々な経済協会の活動家、あるいは「自由主義会議」の人々、ビジネスマンたちは、強力な専門家政府が生まれ、一方でワレサ大統領が社会の不満を食い止めると信じている。マゾヴィエツキにできなかったことがなされると。

クーロン　彼らはそうなるよう望んでいる。しかし、これまでの経験からして、出てくる結果は正反対だろう。われわれが関与してきた政府の政策が正しいという点については、ワレサも認めていた。彼もまたその政策を根づかせたひとりなのだ。そこでわたしの推測だが、彼は、マハルスキが道理に適った政策を実施できるよう、民衆の怒りを一身に引き受ける英雄になるのでは？

大統領と国会

――次の国会議員選挙で、勢力構造はどうなるとお考えか。反対派はどうなる？

クーロン　新政府とて楽な立場にはなるまいが、理性的な反対派の役割もまた非常に難しくなる。なぜなら、苦情や要望がどっと押し寄せるだろうから。私自身は建設的反対派になるつもりで、要求の大合唱に加わる気はない。では、どんな反対派になるべきか、要求志向でない反対派か？

次の国会選挙では勝者が出ないのではないかと心配している。どの会派も多数を占められず、国会と大統領との対立は避けられないだろう。そして１年後か１年半後にはまた選挙があると私は確信している。

――大統領選挙が？

クーロン　いや、国会選挙だ。私は大統領の役割にそれほど重きを置かない。もし、強い国会と強い政府があれば、大統領に何かの意味はあるかもしれないが、今の彼の役割は調停者だ。

大統領は、もちろん、国会を解散させることができる。しかしそれは３カ月間だけのことだ。われわれは自分たちの大統領を選んだのだから、ありとあらゆる悩み、心配事はすべて彼に肩代わりしてもらうなんて考えはまったくのおとぎ話だ。明日になればお金が手に入る、そのお金で店の品物を何でも買おう、と言っているようなものだ。

何ごとについても政治的綱引きをしようとする国会相手では、大統領は機能できない。ところが国会とはそういうものであったし、これからもそうだろう。

典型的な例が私の年金法案をめぐる議論だ。何十人という討論者がいたのに、法案について発言したのは女性ひとりだけ。残りはただ点数稼ぎのために、なんの関連もないことで政府のあら捜しをしていた。

人々は約束された近道などないことを自分の肌で納得しなければならない。社会は1980年と1981年を経験し、中身のないお金をもぎ取っても、街には空っぽの店しかないということを思い知った。マゾヴィエツキ政権の１年間が平穏だったのはそのためだ。しかし１年が過ぎ、今、収穫の時がやって来た。私は最初から、どんなに切り詰めても10年は必要だと言ってきたのだが。

――あなたの考えでは、ワレサ大統領はそれだけの期間、今後10年間ももつだろうか？

クーロン　ここでは大統領は問題ではない、社会意識の状態が問題なのだ。私が心配なのは、われわれがこの色つきの夢から覚めないまま次の国会議員選挙に、それも、小政党を締め出す比例制の選挙に臨むのではないかということだ。

――マルチン・クルルの意見では、何がしかの理性をもつ勢力――ＲＯＡＤ〔市民運動―民主行動〕、民主的右派フォーラム、中央同盟、自由民主会議――の連合が必要だということだが。

クーロン　いまの時点で、ＲＯＡＤと中央同盟

の名を同時に挙げることは、われわれが政府陣営に加わる行列に並んでいるような印象を与える。中央同盟をそのような健全な良識を持った陣営内に引き込むためには、社会が色つきの夢から覚めなければならない。早ければ早いほど良い。

大多数のポーランド人の目覚めが必要なのだ。さまざまな政党が何を言うのかなど問題にならない、わが国の状況のなかでは些細なことだ。私は、わが国の正常化に10年という楽観的な数字を挙げたが、同様に、社会意識の目覚めには１年を見込んでいる。

ヤルゼルスキの道？

――その１年間に何が起こるのか？

クーロン　マゾヴィエツキ政権発足時には、我慢の政策に社会的な一致が得られていた。１年後、この政策への不満に訴えてワレサは勝った。この種の政策はもはや２度と支持されることはない。私はみんなに納得してもらおうと努力した、けっこううまくやったと思っている、ワレサより劣っていたとは思わない。だがこの我慢の政策そのものがワレサをベルヴェデルに押し込んだのだとすると、どうやって彼は人々を説得できる？

こういうことも想像できる――新大統領は警察と軍隊の賃金を大幅に引き上げ、民主主義は棚上げにして市場経済だけを国民に学ばせるだろう。それはもうヤルゼルスキが試したことだ。戦車に守られた適度の商品経済。その結果がどうなったか、われわれは知っている。

最後の希望、それは変革には10年かかると言っている勢力の連合がこの１年の間に生まれることだ。そしてこの連合が、もうひとつ先の（またしても任期切れ前に行われるであろう）国会選挙で勝つことだ。

――ヤロスワフ・カチンスキ〔ワレサの側近〕は大統領側の強力な政党ができると予想している。それと並んで穏健なＲＯＡＤと危険なティミンスキの党が存在することを想像できるか？

クーロン　ティミンスキ党は考えられない。大統領側のにしても同じだ。そこには、大企業には

社会主義的所有を残すべきという人たちと、絶対的自由主義の信奉者の両方が入ってしまうからだ。福祉国家を求める人々とその正反対の人々も。また、ウクライナ、リトアニア、白ロシアとの関係強化を望み、政府が閉鎖的すぎると批判する人々と、かつてポーランド領だったウクライナ、リトアニアなどの地域を再び併合したいと望む人々も同居する。ワレサという人間以外に彼らをひとつにまとめる要素は何もない。

――現存のグループやそれらの連合は、国会選挙前あるいは国会の会期中にも崩壊するのだろうか？

クーロン　選挙の前にも、後にもあり得る。税金、妊娠中絶といったいくつかの具体的な問題がある。これはいままでの分裂とはまったく異なる分裂を引き起こす爆弾だ。

――これらすべては「連帯」にとってどのような意味を持つのか？

クーロン　思うに、労働組合としての「連帯」が大統領選挙に参加したときから、早くて４日後、

遅くとも4カ月後には、人々は「連帯」を手押し車で外へ放り出し始めた。約束を守らなかったという理由で。ワレサが約束したかどうかは関係ない、ひとびとの耳にはそういう約束が聞こえたのだ。ワレサを支持していた「連帯」の各職場委員会の活動家たちは出口のない状況に置かれた――先頭に立って要求を申し立てるか、それとも手押し車で追い出され、組合を分裂させるか。

政党化した「連帯」

――それが「連帯」の終わりだと思うか？

クーロン　「連帯」は非常に多くの場所で支配政党化し、統一労働者党の悪い手本を繰り返した。もちろん、40年代、50年代の党ほどひどくはないが、火傷に懲りて自重していた80年代の党よりもひどかった。「連帯」は、自分たちは社会精神（エートス）を持っているし、地下で闘った歴史も持っているのだから（厳密には闘ったのは今の彼らではないが）、すべての栄光が「連帯」に与えられてしかるべきと考えたのだ。

ある職場委員会が理事長の解職を要求してきたことがある。工場長は、自主管理委員会は自分の味方だと述べた。ところが「連帯」側は私に向かって、「工場長は自主管理委員会を買収した、あなたは彼を辞めさせるべきだ」と言う。私はこう答えた――「では、すぐにピストルを支給しようか？汚れなき理念の名の下に彼を銃殺するがいい。そういう前例がなかったわけじゃないからな」。

この「連帯」の勘定書きをわれわれに突きつけたのがティミンスキだった。もしかするとそれも良かったのかもしれない。この問題を自覚するようにしよう。

――これからますます悪くなると考えているのか、特に地方で。

クーロン　とんでもない！　これは国の統治というスローガンの特異な実現形態なのだ。このスローガンは、われわれの職場委員会、われわれの地区委員会、われわれの市民委員会などなどが統治するようになることだ、と理解されている。そこから、市民委員会と「連帯」地区委員会の見苦しい争いや、トップにおけるわれわれ同士の見苦しい戦争が出てくる。

――あなたは、これらはすべて共産主義の遺産を継承したものだと言う。すべての東欧諸国が不安定な期間を経験しなければならない、ハヴェルは倒される、という意味なのか？

クーロン　ハヴェルは他の大統領たちとは違う、彼は現実の問題についてほとんど何も言ってない、だから最も素早く身を守ることができる。私がブラティスラヴァでみた横断幕には「愛を誓おう、締めつけはやめだ」とあったが。しかし、全体としては、共産主義のあとには、短期にしろ長期にしろ混沌の時期が来ざるをえないと思う。

――ポーランド版の混沌には粛清があるだろうか、ないだろうか？

クーロン　粛清はない。ワルシャワ製鉄所の社会主義青年防衛隊がすでに何度も私の家にやって来た。かれらが違う色合いになる可能性は否定できないが、それはないと信じている。もしかしたらどこかで偶然にそれが起きるかもしれないが。

――あなたはこの人生の大きな敗北をどう感じているか？

クーロン　たしかに敗北ではある。しかしどうして「人生の」敗北なのだ？　私はこれまでいくつもの問題で負けたことがある。それがもうひとつ加わっただけだ。これで最後かどうかも分からない。こんな歌がある――「戦闘、突撃、流血の日々が過ぎ去れば、イギリスから友軍が戻って来る、信頼が群衆の中を、パレードの表通りをやって来る、突撃の歌を口ずさみながら。無数の花束、大勢の娘たち、軍旗、恐れを知らぬ眼差し、足並み揃え、舗道が揺れる。大通りをパレードがゆく、ポーランド、自由ポーランド、それはわれわれの血から生まれた」。

現実のわが国では誰もパレードなどしなかった。地下「連帯」の若者たちはパレードを待っていた、だが何もなかった。マゾヴィエツキは政府を作り、拍手を待った。頂戴したのは足蹴りだった。私は知っている、それが当然なのだ、それが

歴史の真実なのだ。ここではただ死者への弔辞だけが好ましい。

――しかし問題はパレードではなく、努力が無駄になったことだ。

クーロン　無駄にはなっていない。私は社会政策の基礎をつくり上げた。最後までやり遂げられなかったのは残念だ、まだいくつかやり残した問題がある。政府は国会と協力して政策の基礎をつくりつつある。私は一時期国会と格闘し、何とか乗り切ることができた。その時期は終わった。今の私は松葉杖をついている。下院に社会援助法が提出されたとき、それを傷つけるのが怖くて声も出なかった。

――あなたの話には史的唯物論の匂いがある。存在は意識を規定し、歴史はそれ自身の軌跡に沿って進む？

クーロン　私はいつも社会の現実は河のようなものだと思っている。それは流れゆき、観察していればいろいろと重要なことができる。こちらで棒を投げ込めば、向こうに浮かび上がる。

フランスの労働大臣が私に、かつて投獄されていた人間が権力を握ってどう感じるかと尋ねた。こう答えた――「何かが変わったとは感じない。河は昔も流れていたし、いまもそのまま流れている。私はそれを渡ろうとして、河の流れに敬意を表し、棒切れを投げ込む。いつも私はある程度成功した。反対派であったころの方がツキが少なかったとか、多かったとか言うのは難しい」。

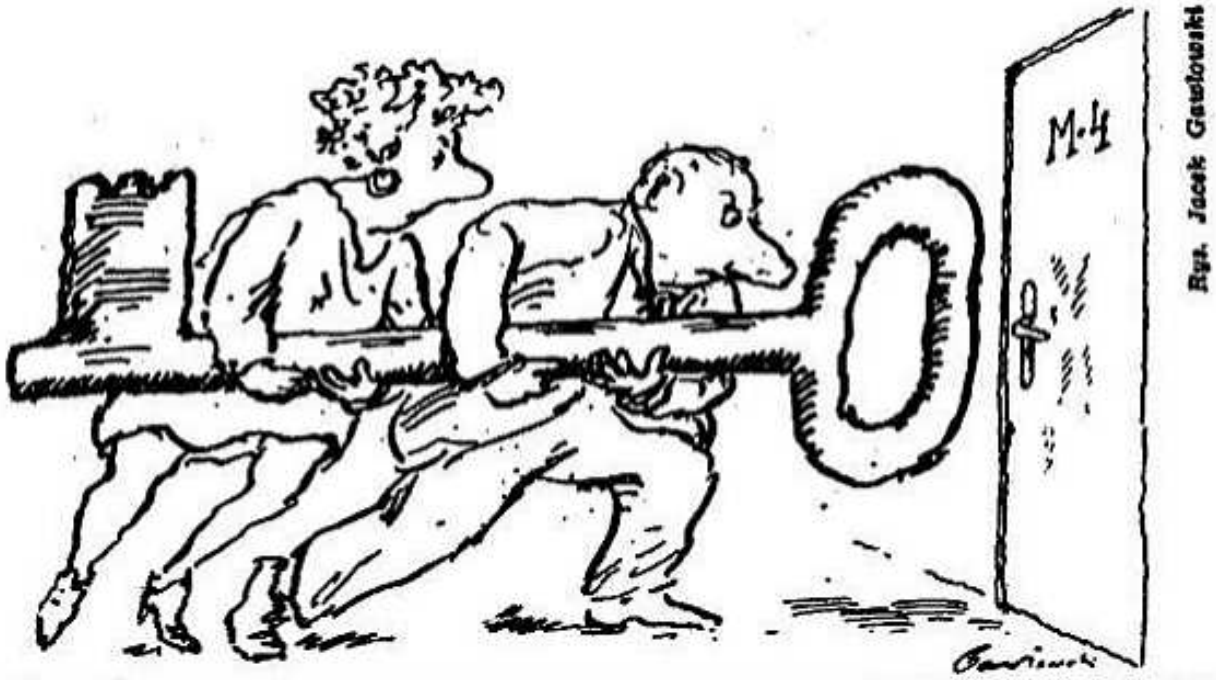
そういうわけで、私は今度の選挙で打ち砕かれたり痛めつけられたりしたとは感じていない。

――いかにもあなたは合理主義者だ。私の記憶では、あなたの大臣就任の際、巷ではあなたがマゾヴィエツキから拒否できない申し出を受けたと言われていた。給料もなく、仕事もなく、社会的問題もない省に、と。そのとき、あなたは私にこう言った。「私がこれからなすべきこと、それはポーランドで最も重要な問題だ。大きな任務、価値ある生活。私はそれをやる。このような意味で、私は絶対的に幸せだ」。

クーロン　少しばかり大げさに言いすぎたな。私にはＳＯＳ基金〔クーロン労相の提唱で設けられた社会的弱者救済基金〕がある。私は、政府の外へ出ても、これまで全精力を注いできた社会政策を実現させてゆくつもりだ。今後も棒切れを河に投げ込み続けるだろう。そもそも私はいつも希望のないことをやっている、だが結局、最後には希望がないわけではないことが明らかになるのさ。

――ありがとうございました。

〔訳：篠崎　誠一〕



【2頁から続く】
疑で調査を始めるよう指示。ティミンスキはテレビで「私の言ったことは正しい」と重ねて自説を主張。●クラクフでストを行っていた市内交通労働者、市当局との合意に達して職場に復帰。グダンスクの市内交通労働者はスト続行中。●産業省と鉱山労働者代表の話し合いは合意に至らず。●全欧安保協力会議（CSCE）パリ会議閉幕。NATOとワルシャワ条約機構加盟国22カ国首脳が「欧州通常戦力条約」「22カ国共同宣言」（不可侵条約）などに調印。

11月20日　前日の交渉決裂を受け、無煙炭を生産する71炭鉱のうち27炭鉱がストに入る。他に3炭鉱が2時間の時限スト2カ所でハンスト。●グダンスク他多数の都市で市内交通労働者がスト続行。●「連帯」全国委員会幹部会はすべてのスト中止を求める決議。また、全国委の許可なく地方の「連帯」が当局と交渉しないよう求める。●CSCE首脳会議でマゾヴィエツキ首相が演説、東西欧州の経済格差解消こそ欧州安定のカギと述べる。

11月21日　CSCE首脳会議、「パリ憲章」調印。●炭鉱ストはひとまず中止される。●グダンスク市当局と市内交通スト委員会が合意、ストは終了。

11月22日　「ティミンスキ現象」に驚いた各紙が彼の過去を問題とする記事を掲載。「兵役検査で精神異常と診断された」（『ジチェ・ワルシャウィ』紙）、「70年代後半からたびたびリビアのトリポリ経由で秘密裏にポーランドに出入りした」（『ガゼタ・ヴィボルチャ』紙）など。

11月23日　選挙運動期間終了。最新の世論調査での支持率はワレサ38%、マゾヴィエツキ23%、ティミンスキ17%。●グダンスク市評議会と市内交通労働者の交渉が不調に終り、市内交通は再びストに。

11月25日　大統領選投票。

11月26日　大統領選第1回投票の結果が判明。1位ワレサ39.96%、2位ティミンスキ23.10%、3位マゾヴィエツキ18.08%。投票率は60.6%。この結果、12月9日にワレサとティミンスキで決戦投票が行われることに。●マゾヴィエツキ首相、内閣総辞職を発表。●マゾヴィエツキ派の選対組織、「ティミンスキを大統領に選ぶのは悲劇である」として第2回投票ではワレサ委員長に投票するようよびかけ。

11月27日　炭鉱紛争に関し、政府と「連帯」全国委が話し合い。政府側はクーロン労相とバルツェロヴィチ蔵相、「連帯」側はユルチャク副議長が出席。

11月28日　政府、来年度予算案を作成し社会経済政策骨子を討議。●ワレサ、マゾヴィエツキ首相に来春の総選挙まで続投を要請。●市民議会クラブ（OKP）、大統領選でのワレサ支持を呼びかけ。A・ミフニクはワレサとの政治的対立を認めながらも、ティミンスキの当選は脅威だとしてワレサに投票すると語る。なおミフニクはOKP脱退を表明。

11月29日　マゾヴィエツキ首相は下院に内閣総辞職動議を提出するが、下院はこの動議の検討を延期。これより先にコザキエヴィチド院議長は大統領選第2回投票まで2週間もある時期の内閣総辞職は問題を生じると語っている。●下院で新しい社会福祉法とパスポート法が可決。パスポート発行は警察ではなく地方行政当局の管轄に。●炭鉱問題に関し政府とOPZZ代表が会談。●ウルスス・トラクター工場の「連帯」代議員大会で、Z・ブヤクがマゾフシェ地区代議員の地位からはずされる。「連帯」が大統領選でワレサを支持している時にブヤクが「市民運動―民主行動（ROAD）」設立に加わるなど反ワレサ色を鮮明にしたため。ブヤクは早期に「連帯」を脱退すると表明。

11月30日　企業民営化スタート。優良5企業の株式が店頭販売され、購入希望の市民が行列。最終的には国内7000の国営企業が3年間で売却される。

12月1日　ワレサ、ティミンスキ両候補が初の共同記者会見。ワレサはティミンスキを「反革命」「旧共産党や秘密警察関係者が後ろについている」と非難、ティミンスキは「ワレサ氏の醜聞を知っている」と切り返すなど激しい応酬。●ROAD、「不本意ながら」ワレサ支持を表明。●ポーランド共和国社会民主主義（旧統一労働者党）、ティミンスキ支持を表明。

12月2日　大統領候補テレビ討論会、ティミンスキが現われなかったため流れる。●ROAD、民主的右派フォーラム、マゾヴィエツキ選対組織の3者は、マゾヴィエツキを代表とする新党「民主同盟」設立を決定。

12月3日　社民党のクファシニェフスキ議長、大統領選第1回投票での同党公認候補チモシェヴィチの得票率（9.21%）に満足を表明、同時に党員・支持者は第2回投票では自由に投票してよいと述べる。

12月4日　米国のチェイニー国防長官がポーランド訪問。コウォジェイチク国防相と両国の軍事的関係や欧州安全保障について会談。

12月7日　大統領選に関する最新世論調査の結果が発表される。ワレサ73%、ティミンスキ16%。

12月8日　舞台演出家タデウシュ・カントルがクラク

フで死去。75歳。

12月9日　大統領選第2回投票。

12月10日　国営ＰＡＰ通信、大統領選集計結果を伝える。ワレサが74.25%（1060万票）でティミンスキの25.75%（360万票）を抑え当選。投票率は53.4%にとどまる。●当選が決まったワレサ委員長は声明を発表、国民に平静と忍耐を呼びかけ。●検察庁、ティミンスキに対し、課税罪容疑で取り調べに応じるまで出国禁止の措置を取る。●外務省、来年1月1日からドイツ人のポーランド入国にビザを免除すると発表。

12月11日　ポーランド駐留ソ連軍の撤退に関する両国間交渉がワルシャワで開始。

12月12日　「連帯」全国委員会でワレサが委員長辞任を声明、後任にＢ・ボルセヴィチを推薦。しかし委員会では来年1月に全国大会を開いて新委員長を選出するまで現在の副委員長2名が暫定的に委員長代行を務めると決定。●ティミンスキ、地検での取り調べの後10万ドルの保釈金を払ってカナダに向け出国。

12月13日　選挙管理委員会、大統領選に関する報告を発表、選挙法の不備を指摘し、例えば選挙前一定期間ポーランドに居住していることを立候補要件とすることなどを提言。●世論調査センターＯＢＯＰの「マゾヴィエツキ内閣総辞職をどう思うか」の調査結果は、「無関心」39%、「不満」26%、「満足」13%、「残念」16%、「喜ばしい」4%。●ＰＡＰ通信によれば、ソ連政府は来年の対ポーランド原油供給量を450万トン（今年の6割減）にすると通告。また、うち300万トン分は西側通貨での決済を求める。

12月14日　下院、マゾヴィエツキ内閣総辞職を承認。ただし、次期内閣の誕生までは現内閣が留任。

12月15日　ワレサ次期大統領、法律家ヤン・オルシェフスキに組閣を依頼。

12月16日　第2次大戦中以来ロンドンで延々と続いてきた「ポーランド亡命政権」代表団が、戦前来の大統領章の引き渡しのためワルシャワに到着。

12月17日　最高裁、大統領選に関し提出されていた51件の異議申し立てすべてを却下。この中にはティミンスキからのものも含まれる。●ＲＯＡＤ、正式に政党として登録し、マゾヴィエツキ率いる民主同盟との連携を声明。●ペントコフスキ法相は70年事件での労働者への発砲に関して当時の軍高官8名を起訴するに足る証拠がそろったと述べる。また発砲命令はゴムウカ党第一書記（当時）が出したとも。●ＰＡＰ通信、サウジアラビアに展開中の多国籍軍にポーランドが軍医療部隊と病院船を派遣することになったと伝える。

12月18日　オルシェフスキ、ワレサ次期大統領と「重大な相違」があるとして組閣を断念、首相就任を断る。

12月19日　来年1月1日から国営交通運賃が40%値上げ予定と報じられる。

12月20日　首相のなり手を見つけられず苦境に陥ったワレサ次期大統領が声明を発表、総選挙までマゾヴィエツキ内閣が留任するか、新内閣を任命するかわり総選挙を最低1年延期するかのどちらが良いか考えるよう国民に訴える。●22日に予定されているワレサ新大統領就任式に、ヤルゼルスキ現大統領が招待されていないことが判明。ワレサのやり方に批判の声があがる。●中央統計局のデータによれば、11月の経済状況は10月に比べ改善の兆しが見えず。労働者平均賃金は141万2500ズウォティ。●ソ連でシェワルナゼ外相が突然辞意表明。

〔編訳：武井摩利〕

編集後記

☆湾岸戦争の勃発で、マスコミは例によって戦争報道一色に。バルト問題が辛うじて報じられたくらいで、他のところでは何も起こっていないかのよう。

☆ともあれ、ポーランドではワレサ大統領が実現し、その下でビエレツキ新内閣が誕生しました。選挙運動中、さんざんこきおろされた経済改革政策が継続されることになり、バルツェロヴィチ蔵相が留任。どこの国でも選挙公約というものは当選が決まれば反古にされる運命にあるようです。

☆当初2月ないし3月にも予定されていた国会選挙は延期。5月に投票という話もありますが、これもビエレツキ政権がどんな業績をあげられるかにかかっているとか。

☆大統領になって委員長を辞任したワレサの後任を選ぶ「連帯」臨時大会が2月中にも開催される予定です。委員長選挙のほか、事実上のワレサ与党と化した「連帯」の基本的な役割をめぐって議論が予定されていると伝えられますが、クーロン、ミフニク、ブヤクら反ワレサ派の面々が去ったあと、実質的にどのような議論が行われるのでしょうか。

☆マスコミは報じませんが、他の東欧諸国の改革の行方も気になるところです。1991年2月20日（み）

ポーランド月報 一九九一年三月号（通巻一〇八号） 一九九一年三月五日発行（毎月一回五日発行）
一九八四年一月一〇日第三種郵便物認可

Rys. Jacek Gawłowski

発行所・ポーランド資料センター
〒177 東京都練馬区下石神井6—35—7
電話 03—3904—0427 郵便振替 東京 2—81069
Center for Polish Research
6—35—7 Shimo—Shakujii, Nerima—ku, Tokyo 177 JAPAN
定価400円・年間定期購読料4600円(送料共)

1991年3月5日発行（毎月1回5日発行）1984年2月10日第三種郵便物認可 ISSN 0286-4479

POLAND MONTHLY ／ BIULETYN POLSKI

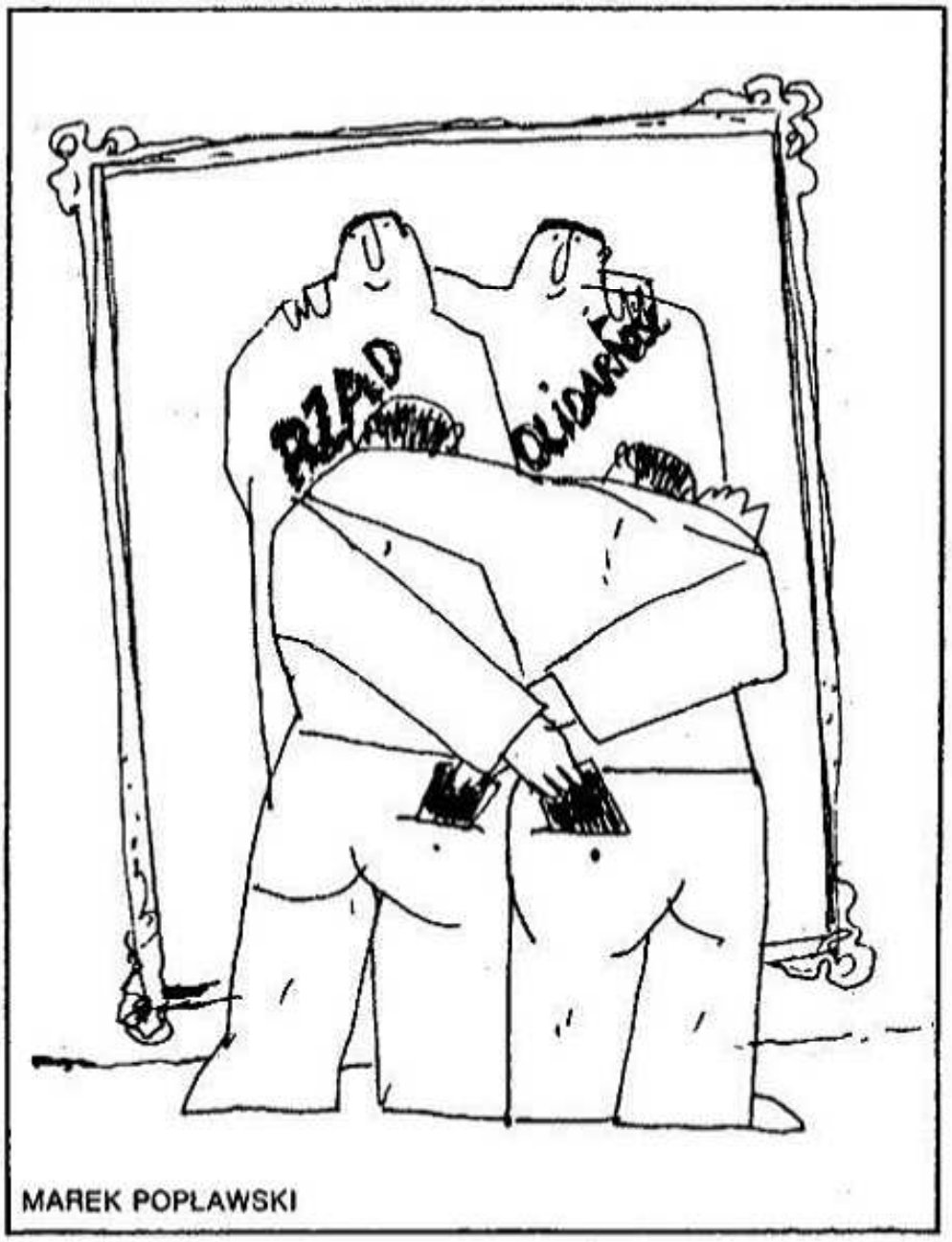
ポーランド月報

1991年
3月号
（通巻108号）
400円

ワレサ大統領就任演説

マゾヴィエツキ首相辞任演説

色つきの夢から目覚めよう　J・クーロン



MAREK POPŁAWSKI

☆☆　ポーランド月報　1991年３月号（通巻108号）　目次　☆☆

改革遂行に全力を尽くす　レフ・ワレサ……3
大統領選勝利記者会見　1990年12月９日
★ビエレツキ内閣閣僚名簿……6

ポーランド第３共和制の発足……7
ワレサ大統領の就任演説　1990年12月22日

破壊された国民的合意……8
マゾヴィエツキ首相の辞任演説　1990年12月14日

色つきの夢から目覚めよう……12
インタビュー：ヤツェク・クーロン

ポーランド日誌　1990年11月９日～12月20日……2／18

ポーランド日誌
1990年11月９日～12月20日

11月９日　マゾヴィエツキ陣営が18日に予定されていた大統領候補者全員のテレビ討論会をキャンセルしたため、バルトシチェ、チモシェヴィチ、モチュルスキ、ワレサの４陣営が共同でこれを非難（マゾヴィエツキ陣営は、討論は主要候補者２人の間で行うか、全員参加の際はテーマをしぼって行うべきと主張）。●下院、旧統一労働者党資産の国有化を可決。

11月10日　ワレサ委員長、ウッチの選挙集会で現政権の改革を「単なる社会主義の修繕」と批判。

11月12日　旧官製労組ＯＰＺＺは大統領選でチモシェヴィチとマゾヴィエツキの２候補を支持すると表明。

11月13日　政府、来年の予算案を検討。歳入は287兆、支出は288兆ズウォティ。●クラクフの市内交通労働者の約３分の１が参加して賃上げスト。●「連帯」全国委幹部会、鉱山労働者が11月中に予定しているストについて、幹部会が政府と交渉するのでそれまでストは控えるよう勧告。●ポーランドとイスラエル、国交回復。●ポーランドとソ連、来年１月１日から貿易決済を国際価格でハードカレンシーにより行う協定に調印。●ドイツ労働相、来年１月１日よりポーランド人とチェコスロヴァキア人にドイツ国内での季節労働（最長３カ月）を認めると発表。●対共産圏輸出統制委員会（ココム）加盟国、ポーランド、チェコスロヴァキア、ハンガリーに対する規制を緩和。

11月14日　スクビシェフスキ外相とゲンシャー独外相、独・ポーランド国境条約に調印。オーデル・ナイセ線を国境として確認。●世論調査センターＣＢＯＳの調査結果によれば、大統領選の支持率はワレサ40%、マゾヴィエツキ25%、ティミンスキ15%、バルトシチェ10%、チモシェヴィチ７%、モチュルスキ３%。

11月15日　ポーランド駐留ソ連軍の撤退問題に関するポーランドとソ連の第１回交渉がモスクワで開かれる。

11月16日　数都市で市内交通労働者がスト。

11月17日　ティミンスキ候補、ザコパネでの選挙集会で政府経済政策を批判、マゾヴィエツキ首相を「国営企業を外国資本に安売りする売国奴」と非難。●世論調査センターＯＢＯＰの調査結果によれば、大統領選の支持率はワレサ35%、マゾヴィエツキ17%、ティミンスキ15%。

11月18日　中央統計局によれば10月の失業者数は100万を突破。

11月19日　ＣＢＯＳの世論調査結果によれば、ワレサ支持28%、ティミンスキ21%、マゾヴィエツキ17%とティミンスキが２位に浮上。●17日のティミンスキの「売国奴」発言に対し、地方検察局が国家要人誹告容

【18頁へ続く】

改革遂行に全力を尽くす

レフ・ワレサ　大統領選勝利記者会見　1990年12月9日

Lech Wałęsa's Victory Press Conference, 9 December 1990
Uncensored Poland News Bulletin, No.24／90, 9 Jan. 1991

【編集部注】　この記者会見は、12月9日の大統領選第2回投票日の夜、即日開票でワレサ当選が確実になったのを受けて行われたもので、テレビ放送された。英文テキスト（ロンドン発行の『無検閲ポーランド・ニュース』）から訳出したが、同テキストには「出典はポーランド・テレビ」とあり、放送を聞いて書き取ったものであるため、数カ所に「聞き取り不能」の部分がある。

〔訳：武井　摩利〕

国民の積極的協力を求める

――あなたは全ポーランド人の大統領になると言われた。有権者のなかにはあなたの対立候補に投票した人々もいるという事実の前で、「全ポーランド人の大統領」とはどういう意味を持つのか。もうひとつ、あなたが委員長を辞めることは「連帯」にとってどういう意味を持つのか。

われわれの眼前にいかに大きな仕事が待っているかはよくわかっている。私はつねに、われわれは最初の段階で勝利したにすぎないと言ってきたし、一部の人々はまだ疑念を抱いている。つまり、われわれは45年間わが国を支配してきた体制と決別したのだ。これからは、その旧体制を倒したと同じやり方で新しい体制を築いてゆかねばならない。

わが国では何もかもがあまりに遅々としか進まずにいる。正すべきあやまりが多数あり、清算されていない問題がいくつもあり、多くの仕事がわれわれの前にある。この面で私は、新しいポーランドを築こうとするすべての人々に、活発な関与をしてくれるよう申し入れるつもりだ。そして私は各人が相違を持ちながらも一緒に同じ方向へ向かって行けるよう、すべての人にそれぞれの持ち場を提供するための努力をする。私は自分がこれに成功することを望むとともに、われわれがこの第2段階を第1段階においてと同様の緻密さで築いてゆけることを期待している。

労働組合「連帯」についてはこう答えたい。まだ選挙の公式結果は出ていない時点ではあるが、私は、自分が到達したと考えるこの立場〔大統領の地位〕から、ポーランドの改革運動としての「連帯」を味方とし、「連帯」によるわが国のすみやかな改革を助けるために尽力するだろう。しかしもちろんこれが多元主義（プルラリズム）や民主主義を建設する上での障害となってはならない。われわれは様々な立場に立つことができるが、国はひとつ、ポーランドはひとつしかないのであり、しかもその国は大いなる活力によって可能な限りすみやかに改革されることを必要としているのだ。

――大統領、〔あなたの構想する〕政府はどのようなものになるのか。誰が首相になるのか。先頃あなたは首相候補として4人の名をあげ、政治的協議が行われているようだが、その結果はどうなっているのか。

何度も言っているように、私には少なくとも5つの可能な選択肢があり、そのうち最良のものが採用されるだろう。現在はまだどれが最良か言うことができないが、火曜か水曜〔12月11日か12日〕には、その時点で最良の選択肢の最終的形態が固まり、われわれの目標とする改革へ向けてわが国をより速いテンポで決然と導いてゆく最良の首相の選定が終わるのではないかと期待している。今日は誰の名も明かすことはできないが、以前に言

及した4名〔の首相候補〕のほかに3人の名を考えている。しかしそれが誰かは今は言わない。

決然とした強いシェリフ

――（…）昨日の『ガゼタ・ヴィボルチャ』紙が、あなたとティミンスキの決闘についての記事中あなたをシェリフと呼んだことについてどう思うか。また、マゾヴィエツキ氏との間で何らかの理解は可能と考えているか。

いろいろなシェリフを見たが、99%は善良で決然として、ものごとを正すシェリフだった。当然、悪いシェリフの数は少なかった。私は良いシェリフ、決然として強くやり手のシェリフになりたいと思っている。しかしそれらは（…聞き取り不能…）私は生半可な気持ちでそれをするつもりはない、全力を尽くしていく。なぜならこの地位には山のような仕事があるからだ。むろん今日適用されている法に定められた権限内で行うが、今日何らかの状況が生じれば、明日にはその法は改善されるだろうと私は考える。次にマゾヴィエツキ首相と彼の経験を生かすかという質問だが、彼はかつてわれわれとともに闘った仲であり、われわれ皆で勝ち取ったこの勝利のなかで、また私の勝利、「連帯」全体としての勝利のなかで彼の占める役割は大きい。彼は愛国者としてポーランドを助け、ポーランドに仕える場を見出すだろう。私はそのことを真に確信している。どのような形でそれが実現されるかはこれからだ。

――81年12月13日の「将軍たちの夜」〔戒厳令布告日〕にポーランド「連帯」革命が圧殺され、あなた自身は自宅から拘禁場所へ連行されたとき、今日あることを信じていたか？

（…）私自身はじめわれわれすべてが求めていたのは、いささか違う形の勝利だったことは覚えておかねばならない。つまりわれわれはヨーロッパの仲間入りできるような体制を望んでいた。他の国々の人々と同じような生活をわれわれに与えてくれるシステムを。われわれは他国の人々にくらべて劣ってもいなければより愚かでもない、ただ良いシステムを持っていなかっただけだ。あなたがたと同じく私もそういう良いシステムを作ろうと意図していた、それがすべてだった。そうした瞬間がいつか来ることは一秒たりとも疑わなかったし、社会がそのために闘いを続け、世界並みのレベルでわが国が発展する可能性を勝ち取るであろうことも全く疑わなかった。

――大統領、あなたはポーランド共和国大統領としての自身の役割をどのようにお考えか。また、大統領の権力はどのようであるのが最もふさわしいとお考えか。次に、ティミンスキ氏はマゾヴィエツキ首相を非難しあなた自身をも攻撃したわけだが、彼に対しどのような対応を取るのか。

何度も言ったように私は〔国に〕仕えたいと思っており、（…喝采の声にかき消されて聞き取れず…）にはならない。私は一生懸命に働く。成果を上げられるよう、ポーランドが真に変わるよう力を尽くす――決然と、力強く、勇敢に、しかし慎重に分別を失うことなく。むろん、繰り返し言っているように私の知恵はあなたがたの賢明さが源であり、私の強さはあなたがたの力を源泉としている。私はポーランド人すべて、なかでも特に若い人々がポーランドという国を分かち持てるように――所有者として、自身の手に分かち持てるように――あらゆる手をつくす。

同時に、その若者たちの手の中の「ポーランドの一部分」が彼らにより良い快適な生活をもたらすよう、様々な障害を除いていくことに尽力する。外国からの借款も含めて。これは恐ろしい程に大変な仕事だが、やりおおせられると信じている。なぜなら歴史上われわれは幾度も驚くべき大事業をやってのけた前例があるのだから。

ティミンスキ氏についていえば、彼は彗星のように登場したのと同様あっという間に消え去ると思う。彼は実際のところ何ひとつ提案しはしなかったのだから。別に私が勝ったから言うわけではなく、本当に彼の言葉はすべてスローガンにすぎず、実際に実行する力など彼にはなかった。しかし民主主義のプロセスにおいて、彼はわれわれの誤りや欠点を示す古典的な例となろう。ただ、同時に彼はわれわれの注目していなかった諸問題を指摘してみせた。

煎じつめれば、もうこんなことはたくさんだと思っている人々、貧困の中で暮らしている人々の存在だ。さらに、そうした人々はワレサをも信じていない。私はつねに社会を感じ取ることができる。私は彼らが疑っていることを感じている。もしもそこに疑っている人がいるのなら、われわれは――疑問を持っていない者すべては――、疑っている人々もすみやかにわれわれの仲間に加わってくれるような形にポーランドを変えてゆかねばならない。われわれには彼らの力も必要なのだ。私は彼らが疑念を捨てるよう全力を尽くし、彼らに自らの運命をより良い方向へ向けるチャンスがあると示すためにあらゆる手を尽くすつもりだ。ポーランドには本当につらい生活を送っている人々が多数いるのだ。

ポーランドのために仕事をする

――ある種の大統領党が創設されるのではないかとの観測がなされている。つまり中央同盟のことだ。これについて何かコメントを。もうひとつ、1週間前のティミンスキとの会見の時、あなたは彼を出国させないと言ったが、それについては特定の行動を考えているのか。

大統領党のことは私には何とも言えない。もし状況がそれを求め、もし改革がそれを求めるなら……もし私の社会の支持が弱すぎたり組織化されないでいるようなら、もしより大きな効果をあげるために必要なら……。私の権力を支持するためではない、私は私利私欲でこの地位を求めたのでもなければ出世したかったわけでも全くない。本当に改革を実らせたいと望み、社会とともに歩みたいと望み、国のために大きな仕事をしたいと望んだのだ。私は勇敢に活力を持って前進するが、それは自分のためではなく、何かをなしとげるため、ポーランドのため、ポーランドの改革をめざして闘うためなのだ……。

〔ティミンスキについては〕行われたすべてのこと、政府への度重なる非難発言その他あらゆる種類のことが明らかにされねばならないだろう。これは関係諸官庁が行うものと確信している。あのような行為は容認しがたく、あのような中傷めいた非難はなされてはならず、あのような恐喝はあってはならないからだ。こういった問題を取り扱う所轄部門の人々は、今後の選挙のため、また民主主義のため、すべての点を調査せねばならない。彼らがそうすることを私は確信しているし、必要なら証拠提出を要求するだろう。そのためなら私は、適切な専門の機関を通じて何でもする用意がある。しかしこれが民主主義の制限や、一種の見世物や、何らかの報復行為となってはならない。あくまで、暗雲を吹き飛ばすための事実の明白化であるべきだ。

彼は明日にでも出国できるだろうか？　答はイエスだと思う。これは政府の問題だと考える。ご承知のように大統領は今日、限定された機会しか持っていない。さしあたりこれは政府の問題だ。彼が言ったこと、したことは明らかにされねばならない。彼を支持した者も多かったし、支持しなかった者も多い、それらの人々のため、社会のために事実の明示は必要だ。私はそれが明らかにされると信じているが、それは政府の問題だ。もちろん私も要求はしてゆく。

軍について

――あなたはポーランド軍の統帥権も持つことになる。ティミンスキ氏はポーランドが核武装すべきだと発言していた。その関連で次の質問をしたい。ポーランドの軍備についてどう考えるか。兵役代替奉仕についてどう考えるか。兵員数についてはどう考えるか。もうひとつお聞きしたい。今年学業を終え、何がしかの金をかせぐために国を離れようと考えている若者たちに対して、あなたはどのような言葉をかけることができるのか。

組織面では、どのように対処していくか私にはわからない。しかし軍について助言してもらう必要はあり、今質問した彼にもその一員に加わってもらうのが良いだろう。彼は本当にそれについて知っており、良い質問をする。私には、彼の年頃の人々の状況がわからない、だがもし可能なら、ポーランドにおいて軍がどのように位置づけられるべきかの新しいイメージを作り出すプロセスに君が参加できるよう約束しよう。

だが、それ以外のことについては、東西の国境をめぐる問題を抱えている今のこの困難な状況下では、われわれの改革プロセスを脅かす者が出ないように強力で高い技術力を持った軍を持つことが必要だと言いたい。われわれは誰とも対峙してはいないが、われわれを取り巻く情勢はなお先行き不透明であり、そうした困難な時期にわれわれを外敵から守るプロフェッショナルな軍隊は必要だ。

軍備についてだが、すでにヨーロッパにはあまりに多くの脅威が存在するので今さら脅威を増やす必要はないと思う。私は核兵器一般に反対だし、原子力をそのような方面で用いることに反対だ。しかし軍のスタッフを基盤に自分の見解を出していこうと思う。軍スタッフはその道の専門家であり、軍に対して今日与えられている政治的課題にうまく対応する最善の解決策を考え出してくれるだろう。

むろん、先程も言ったようにわれわれはプロフェッショナルな軍隊を持つことを目指すだろう。能力と教育が決定的な要素となるようにしよう。プロフェッショナリズムはつねにより良いものだ、しかしそこに至るには過程というものが必要で、一朝一夕にというわけにはゆかない。

違う視点での仕事が始まる

――若い人々のことについてお答えいただきたかったのだが……。月曜日〔明日〕はどんな風に？

月曜にはこのオフィスに仕事に来る。組合の問題のいくつかを引き継がねばならないし、骨折って働いてくれた多くの人々に感謝を言わねばならない。そしてさよならを告げ、違った角度から物を見ることを始めねばならない。そういうわけで明日私は9時半に仕事を開始する。女房が昼食と夕食を作ってくれるだろう。今のところコックもお手伝いさんもいないのでね。

――選挙結果はあなたの大統領としての計画に信任を与えたといえるのか。

私は70～80%得票すると言っていただろう。私が言ったのは選挙全体を通じての得票率ではなく、最終投票での話だ。そして私の言ったとおりになった。

ビエレツキ内閣閣僚名簿

ビエレツキ首相

首相　ヤン・クシシュトフ・ビエレツキ
副首相兼蔵相　レシェク・バルツェロヴィチ*
労働・社会政策相　ミハウ・ボニ
司法相　ヴィエスワフ・フシャノフスキ
中央計画局長官　イエジ・エイシモント
国土計画・建設相　アダム・グラビンスキ
教育相　ロベルト・グウェンボツキ
国防相　ビョトル・コウォジェイチク*
対外経済協力相　ダリウシュ・レドヴォロフスキ
所有移転相　ヤヌシュ・レヴァンドフスキ
内相　ヘンリク・マエフスキ
環境相　マチェイ・ノヴィツキ
文化芸術相　マレク・ロストフォロフスキ
外相　クシシュトフ・スクビシェフスキ*
厚相　ヴワディスワフ・シドロヴィチ
通信相　イエジ・スレザク*
農相　アダム・タンスキ
運輸相　エヴァリスト・ヴァリゴルスキ*
工業相　アンジェイ・ザヴィシラク
官房長官　クシシュトフ・ジャビンスキ

＊印は前内閣からの留任。

ポーランド第3共和制の発足

ワレサ大統領の就任演説　1990年12月22日

President Wałęsa's Inaugural Speech to National Assembly, 22 Dec. 1990
Uncensoerd Poland News Bulletin, No.24／90, 7 Jan. 1991

【編集部注】　1990年12月9日の決戦投票でティミンスキ候補を大差で破って当選を果たした「連帯」委員長レフ・ワレサは、12月22日、上下両院合同の国民議会で正式に大統領に就任した。以下はワルシャワ放送が伝えた就任演説の全文である。　［訳：水谷　驍］

上下両院議長、ならびに国会議員諸氏、そして国の内外の同胞諸君。ここに私は、全国民によって直接選ばれたポーランド最初の大統領たることを宣言する。この瞬間、ポーランド第3共和制が正式に発足する。何ごとも、誰も、この事実の重要性を否定することはできない。わが国の政府が外国の圧力のもとに、あるいは強制された妥協の結果として任命されたあの悪しき時代は終わろうとしている。今日、われわれは独立の再建にいたる長く困難な道に決定的な第一歩を踏み出そうとしている。神意はわれわれに、先人たちの遺志を平和的に実現する特権を与え給うた。独立ポーランドはヨーロッパの平和な秩序の1構成要素となることを望む。それは良き隣人たろうとする。われわれはウクライナ、白ロシア、リトアニアとは数世紀にもおよぶ共通の歴史によって結ばれている。ドイツも同じである。ドイツにわれわれは、ヨーロッパへといたる友好の門を見たい。文化的には西側世界と繋がりながら、一方でわれわれはロシアとの関係において結合と協力の精神を作り上げたい。同時にわれわれは、改革を成し遂げ、経済的に強力なポーランドのみが他国との平等なパートナーたりうることを知っている。

議員諸氏。諸氏の繁忙をきわめた任期中、ポーランドは偉大な成果をあげた。今日国民はさらに多くをわれわれに期待している。彼らは、経済政策と統治形態の変更を期待している。この点でいく百万の有権者の態度は明確である。わが国の改革はもっと速やかに、もっと効率よく、数字だけでなく、何よりも人間のことを考えながら進められるべきである。国家の構造を作り直し、できるかぎり多くの決定が底辺で下されるよう、分権化を進める必要がある。

決定は、国民が生活し、自分たちの問題を理解している場所で下されるべきである。これは、立法上、財政上、巨大な仕事である。同じく偉大な仕事となるのは、普遍的な私有化である。ポーランドは所有者の国とならなければならない。すべての人が国民的財産の一部、わが祖国の一部の所有者となることができ、そうならなければならない。これは、責任へといたる最も簡単な、実証済みの道である。この道を経てのみ、われわれは財貨を倍増し、優れた経営を学ぶことができる。バルツェロヴィチ副首相兼蔵相のプログラムを修正のうえ継続しなければならない。それは犠牲を引き受けるわれわれの決意と能力の実例である。それを実証しつづけることで、われわれは信頼のおけるパートナーとなる。今日われわれは、わが祖国の民主主義の道に向かって大きな一歩を踏み出した。国民によって選ばれた大統領は国民に奉仕する義務がある。これから選ばれる政府と国会にも同じ義務がある。

政府各機関は、日々、市民の信頼を得るために働く義務があることを忘れてはならない。ともに確認しておこう、政府と官僚は国民の声にいっそう耳を傾けなければならない、と。この前の選挙は、だれに対する信任も永久のものではないことを明らかにした。

議員諸氏。私は農民の出である。また長い間、労働者でもあった。国家の最高位へと導いた道のこの出発点を私は絶対に忘れない。私の上昇の事

実を通して、ポーランドのすべての労働者と農民がわが祖国の統治者を自分と同じ人間と感じるよう望みたい。自分たちの力をもう1度信じよう。われわれは大きな力を持つのに、必ずしも常にその使い方を知っているわけではない。

われわれはあまりにもしばしば可能性を疑ってきた。消極性と気力のなさがポーランド人にとって繁栄へといたる途上の最大の障害である。われわれが自分に自信をもって働きはじめる時、最も発達した諸国がわれわれにより一層の関心を示しはじめる。

国民諸氏。親愛なる同胞諸君。キリスト教のないヨーロッパはヨーロッパではない。ポーランドも同じである。ヨーロッパに加わるにあたってそれは、自らのルーツを失うことを望まず、失うべきでなく、失うことはできない。そうであればこそ私は、大統領に選ばれてすぐ、共和国に対する忠誠を誓い、任務遂行のための力を引き出そうとわが国民の魂の故郷、ヤスナグラに赴いたのである。神がそのしもべに力を与え給い、そのしもべの平和を祝福し給うことを信じる。われわれがこの歴史的な好機を生かすだろうことを信じる。

破壊された国民的合意

マゾヴィエツキ首相の辞任演説　1990年12月14日

Tadeusz Mazowiecki's Resignation Speech, 14 Dec. 1991
Uncensored Poland News Bulletin, No 24／90, 7 Jan. 1991

【編集部注】マゾヴィエツキはこの演説を国会の下院で12月14日に行った。内閣の辞職は賛成224票、反対16票、棄権122票で認められた。しかし、同内閣は後継内閣の組閣まで職務に留まることになる。この演説はワルシャワ・ラジオから取ったものである。

〔訳：湯川順夫〕

議長ならびに下院議員の皆さん。わが尊敬すべき議会の意志に従って、下院議員の皆さんは今、1989年9月以降15カ月間の政府活動報告を受け取った。このような長大な文書を提出するのも、それについて論評するのも私の本意ではない。政権交代というこの歴史的時点について重要だと考える点だけにかぎってここでは述べておきたい。

下院議員の皆さん、下院が内閣辞職の受入れの決議を検討しているこの日に当たって、皆さんはきっとポーランドが歩んだ過去15カ月の道のりに思いを巡らせていることだろう。それはわが国の政治・経済体制の根本的な変革のときであった。ポーランドが変わり、その例にならって中欧全体も変わった。15カ月前には、それとは別のポーランドが存在していたし、この地域には別の情勢が存在していた。共産主義国家の政治構造およびその神聖不可侵の抑圧機構がポーランドにおいて存続していた。覚醒前夜にあった中欧はまだ旧来の政治モデルのままにとどまっていた。わが国の対外的立場はポーランドに対する圧力を排除し得るような状態にはとうていなかった。

こうした現実についての意識、国家の安全と国内平和に対する責任感、市場経済の下での独立と民主主義へとポーランドを確実に導いて行こうとする全面的な決意、以上が最初から今日に至るまで私が首班を務めてきた政府の諸活動を決定してきた条件であった。

内閣の辞職という現時点では、ポーランドは別の国になっている。体制は変わった。われわれは共産主義国家圏に属する国家、多くの点で国外の大国に依存する国家から自身の運命を自主的に決定する独立国家に移行した。今日、ポーランドは近隣諸国との関係において、友好的政策を実施する対等のパートナーであり、近隣諸国はわが国の西部国境を最終的に承認することによってこれに報いてくれた。ポーランドは世界においてその威

信を着実に回復しつつある。われわれは、すべてを指令し、最大の専制的役割を演じることを望む一党制の国家から、すべての人が自由を享受でき、国民が政権の担い手を実際に決定する国家へと移行してきた。

今ではポーランドは法治国家であり、独立した裁判所が機能し、警察と軍隊は市民の利益と安全に奉仕している。わが国は報道の自由および結社の自由がある国であり、検閲はもはや存在していない。町や教区のことは自主管理の手に委ねられている。われわれは、イデオロギーに従属し、超インフレによる破壊作用で崩壊状態に陥った中央主導管理経済から、競争的市場と市場による均衡作用の土台がすでに存在する合理的経済制度へと移行した。わが国は安定した交換可能通貨を確保するとともに、対外貿易でかなりの黒字を獲得した。以上のことは、われわれが政権を引き受るならば、国庫をまったく空っぽの状態のままに放置することは決してないということを意味するものである。

約束できなかった安易な道

国家の責任を引き受けたとき、われわれは国の状態がいかに深刻であるかを知っていたが、それがこれほどまで深刻だとわかったのは政権を引き受けてからのことであった。われわれは決して安易な道を約束しなかった。最初からわれわれは、重大な社会的苦痛を伴うことなくインフレを一掃することは絶対に不可能であると警告した。われわれは経済の安定化と経済制度全体の構造的転換とに同時に取り組むという決定を下さざるをえなかった。われわれはそれが短い道でないばかりでなく、その最初が最も困難であることを知っていた。

困難で苦痛に満ちた最初の仕事に着手したのはまさにこの政府であった。必要な政策の実施を断念すれば一般の人々がかえっていっそう大きな代償を支払うようになるのを知っていたので、その実施に際して躊躇はなかった。変革は経済分野だけでなく生活の全分野に及んだ。政府は今、その企図した道の半ばで退陣しようとしている。しかし、実施を約束したすべてのことがすでに実現されるか開始されるかしていると言えるのである。わたしは、こうした成果が過酷な社会的代償をもって支払われたということを痛苦の念をもって受け止めている。失業と生産低下は巨大な規模に達した。不幸なことだがそれらは健全な基礎の上に経済を建設するための不可避の代償だったのである。さまざまな利害集団の期待の間に立って決定を下す必要があるときには、それらの期待を同時に満足させることは不可能である。われわれはこうした中で決定を下すというとりわけ困難な問題にたえず直面し続けてきたのである。

われわれは、自由の実現に非常に大きな役割を果たした大企業労働者に経済の変革が影響を与えざるを得ないということを知っていた。われわれは市場経済システムの導入に関連した諸困難に気づいていた。われわれはこの巨大な社会問題を緩和しようと試みたが、残念なことにその可能性はきわめて限られたものであったし、今なおそうである。

しかし、こうした社会的代償は無駄ではなかった。健全な状態への回復の兆候が生まれており、

すでに、行列の消滅、製品の品揃えの豊富化、民間部門の発展、輸出の拡大、健全な公共財政、交換可能通貨、競争的市場の領域の着実な拡大といった永続的な変化が生じている。こうした諸要素は生活水準の当面の全般的改善という形ではまだ表現されていないが、強固な基盤を確立した分野がかなりある。このことの無視できない表現は今年獲得された40億ドルの外貨準備である。これによってわが国は、この地域の他の諸国に比べてはるかに安全に対外的諸困難の接近に対処することができる。私は、われわれを信頼してくれたすべての人々に対して心から感謝するものである。共産主義体制から離脱しつつある諸国の中でポーランドが変革の点で他をリードしているのは社会の貢献のおかげである。

政治の諸原則

議長ならびに親愛なる下院議員の皆さん。われわれがその活動の中で目指した諸原則を再度思い起こしたいと思う。その第1は、国民を分裂させることなく全国民の参加の下にポーランドを再建しなければならないということである。最初から私は、全員に平等の機会、平等の法、平等の尊厳を与える、すべての市民のためのポーランドを強く支持してきた。この立場は、キリスト教の価値観に根ざしたわれわれの民主的確信の結果である。それはまた社会の状態の現実主義的な評価からの必然的帰結でもある。われわれの任務はすべての人にこの新たな始まりのチャンスを与えることであったと私は確信していた。

しかしながら、この原則は自己の地位を利用して利益を得たり、違法な犯罪を犯したりした者への免罪を意味するものでは決してなかった。民主主義は民主主義的方法によってのみうち立てられる。法は、たとえときとして邪魔や遅延のもとになっているように思えても、法の尊重にもとづいてはじめて作成できるのである。法を逸脱して正義を実現しようとする試みは自身に跳ね返ってくるに違いない。

私は常々、効果的な政策は真実の土台の上に築かれなければ長期的には実施できないと信じてきた。私が政府の仕事を指導していたときに適用に努めた重要な原則は、社会に真実を語るというそれだった。すなわち、経済の状態や国家の可能性、われわれがポーランドを繁栄した国にし、ポーランド国民の生活をよりいっそう豊かにしようとするならば必ず通り抜けなければならない困難な時期についての真実を語るということである。

確かに、この真実を語ることによってわれわれは常に社会から受け入れられるというわけにはいかなかった。これがわれわれの活動の重大な弱点であった。しかし、私が指導する政府を、誤った方向へ社会を導こうとしているとか、繁栄と豊かさへの道の非現実的な展望を提起しているとかとあえて非難できる者は誰もいない。われわれは根拠のない希望を提起しなかった。ポーランド社会は何十年にもわたって虚偽を与えられ続け、非現実的な幻想にさらされてきたので、この原則はポーランドの条件にとりわけ強力に適用されなければならなかった。

共産主義体制からの離脱に伴う非常に多くの問題に取り組んでいる困窮化した社会では、空手形は無意味である。遅かれ早かれ勘定を払う必要が生じる。今日、事態に対して誠実であろうとすれば、大規模なインフレの再発につながる可能性のあるすべてのことについてとりわけ警告する必要がある。われわれの活動の基礎は、政府と社会の間の相互理解であった。

まさにその最初から私は、社会の理解と参加なしにはわが政府に課せられた非常に困難な課題を解決することができないと深く信じてきた。何カ月もの間、この信頼が存在することがわれわれにははっきり感じられた。われわれは、ポーランドを経済危機から脱出させること、そして民主国家を建設すること、この2つの崇高な目的の下に社会を団結させる政府であった。

残念なことに、この国民的合意は壊されてしまった。民主主義への漸進的な道と始まったばかりの経済改革に疑問符がつけられている。

議長ならびに下院議員の皆さん。私は自己の良心に忠実に従って内閣の承認を取り付けて内閣辞職の決定を自ら下す一方、次の内閣が成立するまで憲法の定める職務を現政府が遂行することを約

束してきた。国家の舵は放棄されていない。われわれは民主的制度を建設しつつあり、われわれすべてが民主主義の習慣を尊重しなければならない。大統領選挙での私への支持率は政府計画への支持率にはるかに及ばなかった。しかし、事態の悲劇は、選挙運動期間中に呼び起こされた期待となされた公約とが政府計画の継続と両立し得ないという事実にもとづくものである。選挙の審判をこのように解釈した私は、内閣の辞職を行うことによって多数派の意志を尊重した。

今日のポーランドの条件の下では、政府の指導および市場経済への困難な移行の実施は、広範な世論の支持と政治的支持ならびにさまざまな社会的グループの側の深い理解を必要とする。新大統領が首相の選定にあたって完全な自由裁量権をもつべきであるということもまた理解し得るところである。

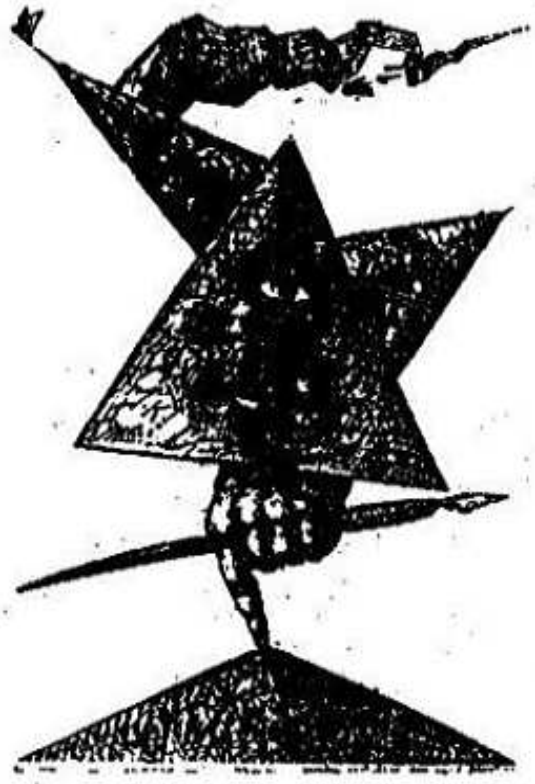
確立された民主主義の制度

ポーランドでは45年にわたって、ひと度手にした権力は政府陣営が2度と手放さないという原則を見慣れてきた。私が首相に就任したとき、われわれは全員その当時の局面の例外的性格を承知していた。しかし、われわれはその後、正常な状態を、つまり、もっぱら革命を通じてのみ政権交代が生じるようなことのない制度を目指す活動に着手した。苦痛を伴いながらも今日実施されつつあるこの移行は、同時に、われわれが実現した正常な制度でもある。それは、過去15カ月の間にポーランドが全体主義国家から民主主義国家への移行の道をどれほど歩んだかを示す証言である。

議長ならびに下院議員の皆さん。私はこの演説を結ぶに当たって、親愛なる下院に対して私の指導した政府に対するその協力に感謝の意を表明したい。この協力期間中、下院において困難な時期が訪れたが、われわれは協力して民主共和国の公的生活に導入した多くの法律は定着している。

私はまた親愛なる上院にも大いなる感謝の意を表明する。さらに、私は大統領にも感謝したい。政府ならびに首相と大統領との協力はこの時期全体を通じて順調に発展した。私はわが祖国の公益のために活動するという私の意志を新たにして新しく選出される大統領のために働く。とりわけ、理解と信頼をもって私自身と政府を最後まで支持し続けてくれたすべての人々に感謝する。

困難なときがわれわれを待ち受けている。このときをうまく切り抜けるためには、ポーランドの主要政治勢力の新たな合意が必要だろう。このことは人為的統一への復帰を意味するものではない。あたらに作られた政治陣営の独自性を維持しつつ、われわれは今や相互の敵意を超越して、ポーランドにとって最高度の重要性をもつ事柄について合意に達しなければならない。開かれた寛容な民主的ポーランド、その最良の国民的、キリスト教的伝統に忠実なポーランド、自由な祖国への神の祝福を求める祈りの中で国民自らが証明している別の姿に変わったポーランド、われわれのあらゆる落胆、われわれの恨みと失敗を超越したポーランド、こうした価値のために私は尽くしてきた。私は今後もこの価値を守り続けていくだろう。これらの価値はそのまま変わることなくその試練に耐えてゆく。



Rys. Zygmunt Januszewski